

カスナーのインド旅行

大河内 朋 子

要旨 カスナーが1908年秋から1909年春にかけて行ったインド旅行について、後年の回想録やエッセイで言及されている箇所を、日程に添って整理し、そこからインド旅行でめざしていた目的を推察した。また、カスナーがインドでの出会いをどう内在化させ、どう表現したかについても述べて、カスナーにおける思索と詩の協働ということを指摘した。

カスナー Rudolf Kassner 1873-1959がヨーロッパを離れたのは、次の4度だけである。⁽¹⁾

- 1) 1905年5月末か6月始めから8日間、タンジール Tanger (モロッコ) に滞在
- 2) 1907年2月1日から4月3日まで約2か月間、アルジェ Algier、ビスクラ Biskra、トゥグール Tuggurt、コンスタンティン Constantine などアルジェリア (仏領) と、チュニス Tunis、カイルーアン Kairuan などチュニジア (仏領) に滞在
- 3) 1908年11月6日から1909年3月6日まで4か月間、インド (英領)、ビルマ (英領)、セイロン (英領) に滞在、帰途1909年3月下旬の3週間、カイロ Kairo、ルクソール Luxor、カルナック Karnack などエジプト (英領) に滞在
- 4) 1911年5月上旬から10月末まで約6か月間、ペテルスブルク St. Petersburg、モスクワ Moskau、キエフ Kiew、ヤルタ Jalta、ティフリス Tiflis、ブハラ Bucharra、サマルカンド Samarkand、タシケント Taschkent など、ウクライナ、カフカス、トルキスタンを含むロシアに滞在

1938年に書かれた回想録「魔術的身体」*Der magische Leib*の中で、カスナーはこれらの旅行が「本当で本物の野蛮人」(VII-160)に出会うために行われたと述べ、本来多様で相互に異質な非ヨーロッパ諸国の文化を「野蛮人」*der Barbar*という語で表現される共通の視点から整理して、ヨーロッパ文化と非ヨーロッパ文化の根本的な違いを際立たせようと試みている。「野蛮人」という表現は、初めて北アフリカを訪問した直後の手紙の中ですでに使用されていて、その手紙の中でカスナーは「私は野蛮人を見たのです」と非常に嬉しそうな叫び声を挙げているのだが、⁽²⁾そのことから分かるように、カスナーは非ヨーロッパ地域への旅行を企てた当初から、「ヨーロッパ人」に対立する観念として「野蛮人」という観念を持っていて、旅を通してこの観念を実際に目で見、体験し、確証したいともくろんでいたと考えられる。「野蛮人」という言葉の代わりに「邪宗徒であること」*das Heidentum* (VII-205)という表現が使われることもあり、カスナーがヨーロッパ・非ヨーロッパという対立項を、キリスト教信仰の有無を軸にして捉えようとしていたことが分かる。

こうした4度の旅行のうち、とくにインド旅行のエピソードは「魔術的身体」以外の著作でもたびたび取り上げられていて、インドでの体験の大きさを物語っている。カスナーはインド旅行に先立つ6年前の1903年2月に『インド観念論研究』*Der indische Idealismus. Eine Studie*という八つ折版90頁の書物を上梓しているが、これは元々「バガヴァッド・ギーター」のドイツ語訳に付ける序文として書かれたものである。⁽³⁾これを読めば、カスナーが訳者の Leopold von Schroeder を始め、Paul Deussen、Hermann Oldenberg など19世

紀ドイツのインド文献学の巨星を通して、古代インドの思想・宗教・哲学に通暁していたことが分かる。カスナーのインド旅行が有意義なものになったとすれば、それは古代インドについての相当な知識を持ち、そして「野蛮人」ないし「邪宗徒」をキーワードにした思索を十分に深めていたからであろう。

さてカスナーのインド旅行はどのような行程をたどったのだろうか。次にその日程を記しておきたい。

1908年10月16日

「P&Oラインの1万トンの蒸気船マケドニア号でロンドン（ティルバリー）から」⁽⁴⁾出発した。「P&Oライン」は、1924年に出版されたE. M. フォースターの小説『インドへの道』⁽⁵⁾でも、インド駐留イギリス人官吏の家族が英印間を往来する手段として登場していることから、当時の一般的で良質の交通手段であったと考えられる。カスナーがこの船上でカプールタラ Kapûrthala の藩王やカルカット Calcutta の名門出身の最高裁判事に会っていることも、「P&Oライン」を利用する客層の高さを証明している。蒸気船はジブラルタル海峡、スエズ運河、紅海を通り、インド洋に出て、ボンベイ Bombay をめざした。

1908年11月6日

船は嵐のためリヨン湾内で三日間停泊したが、到着予定日に違わずボンベイに入港する。カスナーが「魔術的身体」の中でボンベイに言及している箇所は次のとおりである。

「ボンベイで私は油臭いホテルのバルコニーから、どんなふうに一台のピアノが広場を横切ってどこかへ運ばれていくのか、その様子を見た。人間の足の、人間の肩のなんという浪費！人間の声のなんという浪費、そこからは次いで次第に歌が形成され私の方へ昇ってくる。声の和合はゆっくりとそして争いながら成し遂げられた。しかしとうとう統一され、そして多分ひどく調子はずれのピアノ箱は、声の雲の中を栄光に満ちて漂っている。」（VII-228）

「私はこの瞬間、ボンベイ郊外の庭園地区マラパール・ヒルで見たすばらしい、崇高でさえもある画像のことを思い出す。ある庭園の田舎家屋の前、ゆりのきの木陰で三つの裸体の姿がじっとしていた。老人は座っていて、長い人生の幾星霜が柳枝のごとく垂れ下がっているようであり、隣には成年の男がすっと立ち、何かの道具を使っていて、そこから少し離れ、垣根の向こうを見ながら少年が行んでいる。それはマレの絵に似ていた。ここではカーストが姿態の中に、純粋な、呼吸している存在の中に溶解し、秩序へと移行していた、それは肉体と魂の婚姻だった。いずれにせよ三つの肉体の裸形は自然、尺度、自由と関係なかったし、まったく非ギリシャ的だった。」（VII-215f.）

「ボンベイで拝火教徒を、あらゆる年代の男と女を見た時に、私はいつも禿鷹を思わずにはいなかった。何千年来の死んだ拝火教徒がみんな禿鷹の体を通り過ぎて行く。私はその時禿鷹の肉を、羽毛の生えていない首と脚の肉を感じ、味わった。それは拝火教徒が醜いということではない。禿鷹を単純に醜悪だと言うことにもあまり意味がないからである。地上のあらゆる鳥のうちで禿鷹はもっとも美しい飛び方をする。ボンベイ湾の遙かな高みの紺碧の空に描かれる輪を目で追うことは、なんとすばらしいことか。いいや、ここでは美醜が問題なのではない。[中略]／さて私たちがそうしたすべてを熟慮し、加えてギリシャ的な尺度が、私たちが個性、インディビデュアリティと呼んでいるものへの前段階を示していることに注意するならば、アジアの美が根本的には種族的なもの、人種の美として示されている

ことが分かる。私はボンベイで最も美しくない人たちと、だがまさに同地で最も美しい人たちにも出会ったように思う。後者はベルシャ湾の辺りから来たアラビア人の博労で、息子連れの父親たちだった。そんなふうに私はいつも家長、家父を思い描いていた。私同様に、彼らも夕べの浜辺を散策していた、黄灰色の頭巾付きマントを羽織り、その下に茶色い貫頭衣を着て、力強い頭部は首にびったりへばりついている頭巾に守られていて。それで鉤鼻と豊かに反った唇を備えた彼らの瘦せた髭面は、観察している私に静かな眼差しを向ける。太陽が海に沈もうとして水平線に近づいた時、人群から少し離れて召使いたちが泡立つ海岸線に向き合い形で祈禱用の絨毯を広げた。まさにそこにメッカがあるので、顔を沈み行く太陽に向けて、老人たちが跪き、彼らの左右に並んでもっと小さな絨毯の上に二人の年若い息子たちが、そしてその後ろに適当な距離を置いて召使いか奴隷たちが跪いた。そのようにして彼らは頭を曲げ、額で地面に触れ、再び太陽に向かって身を起こした。一族の秩序がここでは美であり、もう一度言おう、種族の美、礼節なのである。」(Ⅶ-194ff.)

1908年11月上旬

ボンベイから550km北上して、西インド・グジャラート地方の中心都市アーメダーバード Ahmedābād に移動する。カスナーは「ベナーレスの聖者」*Der Heilige von Benares* と題された1937年のエッセイの中で、この都市に関連して次のように述べている。

「興味津々の体で立ちほだかっていた私に、彼は手で、目を逸らすようにという合図をした... まったく同じ合図を、ただもっと憤慨して、ジャイナ教の禁欲行者がアーメダーバードで、インド西部のかの都市で、行った。そこでは、そこに棲息するすべての動物、とりわけインドリス、静かで非常に孤独で思慮深いインドむくどり、猿、おうむ、のすり、すべてが人間に対する怯えをなくしている、というのも人間が動物にかの地で何かの危害を加えるということが、二千年以上も前から起こっていないからである。それは、ジャイナ教の最も熱心な信奉者たちが、足で地面の昆虫を踏み潰さないようにと、小さな箒で自分の歩み行く道を掃き清めるあの地である。だがジャイナ教の禁欲行者は、小さな祠や御堂の中にいる代わりに、頑丈な鉄格子の付いた本物の檻の中に座っていて、ちょうど私たちの所で動物園の猛禽類がそうしているように、あるいは私がアーメダーバードの次に訪れたジャイプールで、捕らえられたばかりの虎や豹が藩王の庭園でそうしていたように、その中で暮らしていた。ただ、腐っているかまたは新鮮な肉の代わりに、ガンジス河岸の聖者と同じような小麦玉で体を養っていた。そのジャイナ教徒は明らかにそれによって動物の苦しみを引き受け、肉の苦悩と収監を我が身の上に引き起こし、自分を動物に似せようとしていた。彼は確かにそう望んでいた、あらゆる形象性や比喩の彼方へ越え出て、技巧もなく、仲介もなく、中心であることを、そして他者の中に自分を映すのではなくて、他者の中へ飛び込むことを。／私は、私が同一性の世界と呼んでいるものを、地上で、実際の生活自体の中で、かのアーメダーバードのジャイナ教寺院におけるほど、あるいはこの生ける聖体が住まう祠を前にした時もそうだったのだが、はっきりと目にし、見て楽しんだことはない。そのことを回想しながら私は今こう自問する、この同一性の世界の本質は、人間が客体を棄揚するか抹消することによって、空想が空想自体によって棄揚されることにあるのではないかと。」(Ⅶ-250f.)

カスナーは当初アーメダーバードからさらに北上してラジャスタン地方に入り、ウダイプール Udaipur を経てジャイプール Jaipur に向かう予定であったが、船上で知り合ったカプールの藩王の誕生祝賀行事に遅れないためには、ウダイプール訪問を断念しなければなら

なかった。そのことをカスナーは後々まで悔やんでいる。⁽⁶⁾

パンジャブ地方にあるカプールタラへ行く前に、カスナーはラジャスタン北辺の小都市タネサール Thanessar に立ち寄っている。⁽⁷⁾カスナーに拠れば、タネサールは「インドの最も神聖な場所の一つで、マハーバーラタでパンドゥの息子たちが戦った大会戦の思い出に捧げられている。それはアルジュナとクリシュナとバガヴァッド・ギーターの地である。」(VII-202) そうだとすれば、A. W. シュレーゲルのラテン語訳「バガヴァッド・ギーター」を通して古代インド思想の世界に導き入れられたカスナーにとって、タネサールは見逃すことのできない土地であったと言える。もっとも「魔術的身体」では、同時代のタネサールが回想されているけれど。

「私はタネサールを通り抜けていき、ほどなくして湖に出た。その岸边には白い大理石のヒンドゥー教寺院が建っていた... 寺院からは大理石の階段が湖水に通じていて、階段の上では乱雑にばらばらと裸の老人が何人も座っていた。頭巾も被らず、頭蓋骨は陽光を浴びて銅製のやかんのようにびかびか光り、誰もが羊皮紙でできた古いごつい大型の本を開けていたが、そこに偉大な異国の文字が書かれてあるのが私の目にもはっきり分かった... 老人の周りを何匹もの猿が歩いていた、あるいは座っていた。そのうちの一匹は一人の老人の側へびったりと寄って行って、一緒に本を覗いていた。彼らの直中をインドリすが階段を昇り降りして走り抜け、大変孤独なインドむくどりがびょんびょん飛び跳ねた。動物たちは天国でのように人間に対して怯えがなかった。空中には何の音もしなかった。ひょっとすると時折鳥の叫びや翼の羽ばたきが対岸から響いてきたかもしれない。インドのすりのびーびーいう叫び声を聞かずに済んだのは、私がインドの地を踏んで以来、確かに初めてのことだった。のすりの鳴き声は日の出から日没まで大気を切り裂き、いつも私に荒々しいと同時に悲しげな印象を、大きな苦悩の印象を残していた... / 私は魔法にかけられたかのように、タネサールの寺院の敷地に立ち、夕方になるまでその場から動かなかった。その時、私が聖なる老人たちにとってもその周囲にいる鳥獣にとっても存在していないことを、感じていた。/ この老人たちの裸形もギリシャ的ではなく、魔術的身体だった。[中略] / だがタネサールの聖者たちの幸福はまず、被造物と創造者が互いに対する境界を持たず、互いの中へと掴み込んでいることにある。別な言葉で言えば、幸福とはここでは、我々が神性から墜落していないことを意味する。ちょうど惑星が太陽の引力場から抜け落ちないように。」(VII-202ff.)

1908年11月下旬

カプールタラに到着し、藩王の誕生祝賀行事に列席する。⁽⁸⁾誕生日前日の23日には公式の晩餐会があり、英国総督、軍相、内務相、ヨーロッパからの他の客人などと同席した。誕生日の24日には納税の儀式や舞踊、シク教徒の連隊行進、猛獣狩りなどを見物した。カスナーは迎賓館が満員で入れず、三日三晩テントで起居した後、払暁に馬車で湿地地帯へ出発する。「魔術的身体」では次の場面が回想されている。

「だが私が話したいと始めから思っていたのは、誕生日の朝シク教寺院で行われた祝賀会だった。藩王は金糸ですっかり飾られた群青色のピロウド地の祭服に身を包み、宝石の縫い込まれた短剣を帯に差し、明らかに寺院の用具である非常に大きな秤の片方の皿に乗った。他方の皿にはそれから一匹の生きたこぶ牛の子、二、三袋の小麦と米、バター（ギー）の入った大きな桶、ギーにはブラフマンたちがインドの至る所で今日もなお、四千年前のヴェーダの時代と同じような押さえがたい欲望を持っているのだが、そのギーの入った桶、そして金の

入った、小さいけれどずっしりと重い小袋が置かれた。さてそれらの重さが互いに計量された。藩王の周りに立っている僧侶たちに、秤の釣り合いを取る仕事が委ねられ、僧侶たちは、誕生日の主役が立っている方の秤の皿を吊るしているロープにぶら下がっていたが、そこにながしかのおかしみがないわけではなかった。その後でようやく藩王は祭壇の前へ歩み出て、そこで祭司長が太陽や月、星座、十二宮、三角、五角、その他何角かの多角形、文字、数字の書き込まれた非常に大きな書物から、藩王の次の一年間を星占いした。／さてこうした一連の手続きでは、ある一つのことが考量されえないことは明らかである。それは所与の困難と想像上の困難を含んだ自我である。所有に対して、所有物に対して計量される人間の身体、それは確かに最も単純で最も目立った形での魔術的身体である。(自我のない) 魔術的空間世界の内部においてのみ、物はそのようなやり方で互いに有効性を獲得し、重みを持ち、加えて物として存立できる。／こうした教えを私は当時カプールタラのシク教寺院で非常に強く心に刻み込んだ。今日でもなお私にとってはそこに所有の最後の意味が、原理念がある。」(Ⅶ-170f.)

1908年11月末

カプールタラから西進し、現在はパキスタン領になっているパンジャブ地方のラホール Lahore と西北辺境地方のペシャワール Peshawar に行く。カスナーは1947～48年にもインドを主題にした3編のエッセイ「インド三幅画」*Indien. Ein Triptychon* を書いているが、その1編「義の人」*Der Gerechte* の中でラホールの娼婦に言及している。

「死は生にここで、アジア全域で、我々のヨーロッパとは違ったふうに併合されているように思える。死はそれほど覆われていず、それほど対立項でなく、苦しみは全体の中へ、すでに子どもの顔つきの中へもっと引き入れられている... ラホールの繁華街の一つに建っている小さな家々の木彫りのバルコニーに、小鼻と耳に無数の金銀の輪を付けて、娼婦たちが真面目な顔をして座っていた。金銀の輪や髪飾りの宝石と同じように笑いや喜びがこの場に、すべてに、この職業にふさわしいと考えて、娼婦に下から笑顔を向ける者は、上からはほえみ返してもらえないだろう。今日新聞報道されているイスラム教徒とヒンドゥー教徒の間の怖ろしい殺戮も、ある種の仕方で、生と死のこうしたより近い結合からきているように思える。」(Ⅸ-11)

1908年12月1日

2頭のアラブ馬の引くトンガ(小さな二輪車)で、ペシャワールから西に約50km離れたカイバル峠(海拔1072m)へ向けて出発する。⁽⁹⁾カイバル峠は対ロシア防衛戦略上最重要な地点と見なされていて、英国政庁は現地の山岳民族に、アフガニスタン国境までの12マイルにわたる峠の監視を委ねていた。カスナーはおそらく3時間ほどトンガに揺られた後、正午頃に、ペシャワールから30数km離れたアリー・モスク Ali Masjid (海拔742m)に到着する。通常ここから先への通行は禁じられていたが、毎週2度だけ通過できた。ここでカスナーは何千頭もの駱駝、馬、驢馬を連れた二組の隊商に出会う。

1908年12月上旬

ペシャワールから南東方向へ転じ、北インド地方に入ってガンジス平原を東進し、ジャムナ河畔の旧首都デリー Delhi とタージ・マハールのあるアグラー Agra、カスナーの従者アリー Ali の故郷でもあるラクナウ Lucknow、ガンジス河とジャムナ河の合流する聖地アラハーバード Allahâbâdを訪れる。この間12月3日に鉄道事故に遭い、荷物を焼失した。

エッセイ「義の人」はイスラム教徒の苦行者を巡る回想と比喩的な物語から成り立っているが、そうした行者をカスナーはアラハーバードで見ている。

「私が彼を見かけ、驚いてぎくっとして釘付けになったのは、アラハーバードでのことだった。アラハーバードとは神の町という意味である。東を向いた市門の前で、灼熱の太陽に曝されながら、彼はじかに地面に座っていた。周りには、忙しなく行き交う人々とせき立てられて歩む動物のたてる埃が舞っていた。[中略]／そして彼は右腕を挙げていた。だがその腕はまるで墓が暴かれたミイラの腕のように死んでいた、壊死していた、あるいは次の嵐が来れば、瑞々しい緑の大枝小枝からちぎり取られ、地面に投げとばされる木の枝のように乾き、枯れていた。指は鉤爪のように曲がり、爪もひどく長く伸びて内向きに掌の方へ曲がり、指の関節はもじゃもじゃした褪せた色の毛に覆われているが、その毛は枯死した植物の繊維を思わせた。そういうふうに彼は座っていた。年齢は見当が付かなかった...／というも生きているものと死んでいるものが一組になっているこの場所やこの時において、時間や時間の刻印が何であるだろうか。あるいは一瞬まるでここで自分の死体を肩に担いでいるように見えないだろうか。」(IX-10)

1908年12月13日

ガンジス河に添って下り、ヒンドゥー教の聖地ベナーレス Benares に到着する。ガンジス河畔の雑踏の中で、腰布も巻かず素裸で祠に住んでいる「聖者」を見る。

「行為ということについて語らねばならないとすれば、家や修道院にいたのではなく、祠に座っているという他ならぬ事実がすでに、彼が通常の意味での、人間的な意味での行為からまさに解放されているということ、あるいは彼の行為には先端や目標が欠けざるをえないということと同じ意味をもっている。彼の「行為」、彼の仕事とは次のようなことだ。つまり子どもを産めない女たちや、あるいはすでにいる子どもたちに加えてもう一人子どもの欲しい女たちが、遠くから巡礼してきて、言葉で再現できるとは限らないさまざまな仕方で、彼の、禁欲によってはや興奮に与ることのない部位に、男の欲望と生殖の力が最も密に凝集する場ないし通路であるあの部位に触れる。聖者はそれを「行う」のである。それは同時に受苦でもある行為であり、それ故に、こうした「目的」のために彼は家や修道院ではなく、祠に座っているのである。これは同一性世界の他にないほど崇高な表現であるが、ここから得られる偉大な教えは、生殖力と諦念は互いに誘引しあう、あるいは互いに結合しあっているということと、諾と否の間の、承知と不承知の間の壁が壊されて、いまや両者が自由に押し止めがたく互いに流れ込みあうということである。あるいはまた生殖と誕生の力強い流れは、禁欲行者の行為または受苦の行為がなければ、河床を見いだせないということである。これがインド的禁欲の最も深い究極の意味である。」(VII-254f.)

カスナーはベナーレス滞在中に、あるいはカルカッタへ向かう途中で、ベナーレスから70kmほど東方にある仏教の聖地ブッダガヤー Budhgaya を訪れている。

「私が言いたいのは、このまったく夢のような、現実とは思えない都市で、日没の直前にある葬儀に出くわしたということである。その葬儀が私の目を引いたのは、埃と同じ色の布に包まれた死体の後ろから、人々が舞踏の足どりを踏みながら続いていたからである。これはどのような人の野辺送りなのかという私の問いに対して貰った返事は、「パーリア（不可触民）」だった。踊り手が死体の後ろで踊っていた、それは、今やすべてが終わったということへの喜びを表すためだった。／カースト制度を廃止したブッダにちなむ町で、この時しか

しながらとりわけ死によって、死を通して、橋が架けられ、対立ということが定められ、そのことによって虚栄もまた確立された。徒勞という意味での虚栄が。」(IV-376)

1908年12月下旬

ベンガル地方の中心都市である首都カルカッタに着く。カスナーは年末から翌年1月18日までの約3週間ビルマを旅行したが、その期間を除いて1月下旬まで従者アリーとカルカッタのホテルに滞在した。その間、インドへの船上で知り合った判事チョードリーChaudhuriの案内で、市内を見物している。カスナーが見たのは、乞食と見まがう格好をした「百万長者」たちの住む狭い汚れた街路、いくつもの庭園を囲む広大な歓楽地区、ブラフマ神の妻である女神サラスパティをまつる祭祀の行列などである。このサラスパティ祭の途中で、松明と銅鑼を持ったシバ神の神官たちがシバの妻である女神カリの立像に駆け上がるという出来事に遭遇したが、その様子をカスナーは1937年のエッセイ「シバの神官」*Der Shivapriester*で次のように述べている。

「松明を持った僧の顔が目についた。炎の輝きに赤く染まり、酔ったようであり、髭はなく、額を頭頂辺りまで剃り上げ、脂ぎった長い髪を首筋できつく髷に結び、両眼は熱く暗い石のようだった。顔の特徴は、自己主張を心得た強固なるもののそれではなく、歪められたようであり、情け容赦がないと同時に不安に怯えているものに現れる歪みを示していて、それは苦しい夢を見た後の病人の顔に表れる痕跡や澱に似ていた。その瞬間、私が見もし感じもししていたことはただ一つだけである。カリが奉られているこのまたは至る所の寺院において、女神の祭壇の前で日々犠牲に供せられる山羊の苦しみと死の痙攣が、てかてかして年齢不詳にみえる僧の顔の中へ飛び込み、そこに穿たれたのだ。／さて顔から顔へ飛び渡ろうとしたジャンプが、二つの魂のこうした交換が起こったのであり、行われたのである。問題は、どこでかということ、どんな領域であるいはどんな秩序の中でかということである。この場合、領域と秩序だけが決定的である。答えは、疑いもなく魔的なものの秩序の中で、である。ここでは僧と犠牲の獣が互いの方をめざし、互いに求め合い、そして初めから互いのものなのである。」(VII-258f.)

1909年1月23日

日の出時の数瞬間だけ黄金色に燃えるエベレストの山頂を見るために、カルカッタから650km北方のダーヅリン Darjeeling (海拔2134m) へ向けて出発する。⁽¹⁰⁾カルカッタの北方約530kmのシリグリ Shiliguri からはヒマラヤ山岳鉄道に乗り換え、毎時300m以上づつ高度を上げながら約5時間半でダーヅリンに到着したと思われる。ダーヅリンでは従者アリーと共に小さなホテルに投宿し、ある日の未明2時か3時頃、約17km南東にあるタイガー・ヒル Tiger Hill (海拔2590m) に向け、数名の男が担ぐ輿に乗って出発した。途中で仏教寺院のある村を通り過ぎ、ちょうど日の出の瞬間にタイガー・ヒルに着く。エベレストは見えなかったが、世界第3峰のカンチェンジュンガ Kanchenjunga (標高8586m) の陽光に輝く山頂に圧倒された。

1909年1月27日

カルカッタで乗船し、セイロン島のコロンボ Colombo に移動する。

1909年2月下旬

海路で南インドに戻り、タミール・ナドゥ地方のツチコリン Tuticorin で下船する。その後、ともに複合的なヒンドゥー教寺院をもつ古都マドライ Madurai とタンジョール Tanjore、⁽¹¹⁾

2月24日には港湾都市マドラス Madras、そこから北上して、南インドのイスラム文化都市ハイダラーバードHyderâbâd、石窟寺院で有名なエロラ Ellora を訪れた。

1909年3月6日

往路と同じく「P&O ライン」の蒸気船で、ボンベイから帰国の途に着く。

以上4か月にわたる旅程から、カスナーがインド旅行を企画した当初の目的を推測しておきたい。

まず11月初旬から3月初旬までという季節であるが、熱帯モンスーン気候のインドでは秋と春の乾期に当たり、涼しく乾燥した季節風が大陸から海洋に向かって吹き出す。平均気温も20～25度程度でしのぎやすい。インド滞在がこれ以上伸びると、日中は35度を超す灼熱の乾燥した季節に入るし、もう少し早くインドに来れば、雨期の末期に重なりかねない。カスナーの日程はインドの乾期を最大限利用したものと言える。ただすべての地方が快適な気候を約束していたわけではなく、高地にある西北部のペシャワール辺りでは「空気は乾燥していて、皮膚がひび割れるほどだし、朝はひどく寒く、昼は暑い」⁽¹²⁾というように寒暖の差の激しい内陸性気候を示しているし、ヒマラヤ山脈に近い東北部のダーズリン辺りでも夜は凍えるほど寒くなる。

次に行程だが、もう一度滞在地の順にまとめると、ボンベイ、アーメダーバード、(ウダイプール)、ジャイプール、タネサール、カプールタラ、ラホール、ペシャワール、カイバル峠、デリー、アーグラ、ラクナウ、アラハーバード、ベナーレス、ブッダガヤー、カルカッタ、ビルマ、カルカッタ、ダーズリン、カルカッタ、コロンボ、マドライ、タンジョール、マドラス、ハイダラーバード、エロラ、ボンベイとなり、ボンベイを起点にして時計回りにインド亜大陸を一周していることが分かる。おそらく船上で藩王に出会ったために急遽旅程に組み込まれたであろうカプールタラを除けば、当初から訪問が予定されていた都市はすべて、ヨーロッパからの旅行者にとってごく普通の観光地ばかりである。⁽¹³⁾それらの都市には壮麗な宮殿や城塞（ウダイプール、ジャイプール、デリー、アーグラなど）、大規模な宗教的建築物（デリー、アーグラ、マドライ、タンジョール、エロラなど）、聖地（アラハーバード、ベナーレス、ブッダガヤーなど）といったような、一般の旅行者を引きつける何らかの観光名所があり、なぜその都市へ行くのかを尋ねる問いの入り込む余地がない。個々の滞在地は無難に選択されていて、そこからはいかなる特殊な関心事も読み取れないし、どんな冒険的な意図も洩れてこない。しかしインド亜大陸をくまなく見て回るといふ大旅行の計画には、カスナーの尽きることのない知的好奇心と旺盛な実行力が如実に現れている。小児麻痺に罹ったために足が不自由であったことや、冬のモンスーン期であっても暑いインドの気候を考え併せれば、この行動力と体力、カスナーを動かす知的好奇心の強さには驚くほかない。インド亜大陸を一周して、主だった観光都市をできるだけ数多く訪れるという旅行計画は、とりもなおさず広大なインドの多種多様な文化をできるだけ幅広く体験したいという意欲に発しているのではないかと思う。言語的にも宗教的にもインドの文化は南北に大きく二分でき、アーリア語族系の北インドがヒンドゥーとイスラムの混交した宗教文化圏であるのに対し、イスラムの影響を受けていない南インドでは独特のドラビダ語系文化が開花している。局地的には東北辺境のダーズリン周辺やシッキム地方は仏教の、また西北部のパンジャブ地方はシク教の中心地であるし、それよりもさらに西方の西北辺境地方にあるラホー

ルやペシャワール辺りでは住民の大半がイスラム教徒であった。アラビア湾岸のグジャラート地方には多数のジャイナ教徒が住んでいるし、同じグジャラート地方とボンベイ周辺にはゾロアスター教徒もいる。カスナーの行程を見ると、インドの二大宗教であるヒンドゥーとイスラムに関わる観光名所だけでなく、もっと信徒数の少ないジャイナ教、仏教、シク教、それにゾロアスター教の中心地域も含まれていることが分かる。たとえば、ガンジス河畔のアラハーバードとベナーレスはヒンドゥー教の名高い聖地であるし、南インドのマドライとタンジョールにはドラビダ建築様式のヒンドゥー教寺院がある。タージ・マハールのあるアグラ、そのモデルになったフマユン王陵のあるデリーはイスラム文化都市である。カスナーがブッダガヤーを訪れたのは、もちろんシッダルタ・ゴータマが悟りを開いた地だからである。アーメダーバードやウダイプール、ジャイプールではジャイナ教徒に、パンジャブ地方のカプールタラではシク教徒に出会う可能性があり、ボンベイでは「沈黙の塔」と呼ばれるゾロアスター教徒の鳥葬地を見ることができるとも思われる。そしてインドでの宗教体験の旅をまるで締め括るかのようになり、カスナーは最後の訪問地としてエロラを選び、仏教とヒンドゥー教、ジャイナ教それぞれの石窟寺院を見ることにしていた。私はカスナーのインド旅行の目的が宗教文化の多様性を体験することにあったと推測しているのだが、そのためにはインド亜大陸の一地方だけに滞在するのではなく、周遊してさまざまな地域を訪れることがどうしても必要だったのである。

しかし行程を決めるうえで主要な役割を果たしたであろうこうした観光名所は、カスナーが後年著したインド旅行の回想記やエッセイの中でほとんど一言も言及されていない。せいぜい1948年のエッセイ「聖なる山」*Der heilige Berg*の導入部でダージリンからタイガー・ヒルへの小旅行が詳しく記述され、「魔術的身体」でカイバル峠周辺の荒涼とした光景が描写されているぐらいである。回想の主な対象になっているのは、上記の引用箇所からも分かるとおり、それぞれの観光都市で見かけた、たいていは何らかの宗教に帰依しているインドの名もない普通の人々である。たとえばそれは禿鷹を連想させるボンベイのゾロアスター教徒であり、浜辺でメッカに向かって礼拝するイスラム教徒のアラビア人父子であり、まるで動物のように檻の中に座っているアーメダーバードのジャイナ教行者であり、こぶ牛や小麦や米などの重さを計量するために、秤の片方の皿に乗ったカプールタラの藩王やシク教の僧侶たちであり、アラハーバードの市門の前に座り、ミイラのように壊死した右腕を挙げ続けているイスラムの苦行者であり、子どもの欲しい女たちのために、素裸で祠に住んでいるベナーレスの聖者であり、カルカッタのサラスパティ祭の最中に、松明を持って女神カリの立像に駆け上がるシバの神官たちである。カスナーが宗教的に意義深く歴史ある都市を順々に結ぶ旅程にしたのは、その都市の宗教的名所それ自体を見学するためではなく、むしろその名所に結びつく宗派に属する人々や僧侶、行者たちに出会うためではなかったかと思う。実際こうした人々の姿や行為は熱心に念入りに細部に涉って精確に観察されていて、まるで一幅の絵画のように造形上非常に印象深く再現されている。それは言葉で描かれた宗教的人物画と言って良く、カスナーを深い瞑想へと誘った形象の言語的表現である。そしてこの瞑想へ誘う形象ということ、形象化された現実が瞑想の呼び水になるということ——ここにカスナーの際立った特徴である、哲学的思索と文学的形象の密接な関連を見て取ることができる。カスナーは抽象的命題ではなく、具象的で印象深い形象に刺激され誘発されて思索するタイプの思想家であり、また同時に、到達した思索の内容を抽象的にではなく、比喩や形象

など含蓄のある意味深長な、時には謎めいてもいる文学的言語で表現する。そのために、思想的な要素も文学的な要素も包含しうるジャンルであるエッセイや比喩的物語などが、カスナーに最適の表現形式として選ばれることになる。以下に、檻の中のジャイナ教行者が描かれた箇所を再度引用して、カスナーの思索と表現の特徴を例示しておきたい。

「だがジャイナ教の禁欲行者は、小さな祠や御堂の中にいる代わりに、頑丈な鉄格子の付いた本物の檻の中に座っていて、ちょうど私たちの所で動物園の猛禽類がそうしているように... その中で暮らしていた... そのジャイナ教徒は明らかにそれによって動物の苦しみを引き受け、肉の苦悩と収監を我が身の上に引き起こし、自分を動物に似せようとしていた。彼は確かにそう望んでいた、あらゆる形象性や比喩の彼方へ越え出て、技巧もなく、仲介もなく、中心であることを、そして他者の中に自分を映すのではなく、他者の中へ飛び込むことを。/ 私は、私が同一性の世界と呼んでいるものを、地上で、実際の生活自体の中で、かのアーメダーバードのジャイナ教寺院におけるほど... はっきりと目にし、見て楽しんだことはない。そのことを回想しながら私は今こう自問する、この同一性の世界の本質は、人間が客体を棄揚するか抹消することによって、空想が空想自体によって棄揚されることにあるのではないか、と。」(VII-251)

ここで「同一性の世界」についてカスナーの論述を引きだした契機は、言うまでもなく檻の中にいるジャイナ教徒を見たこと、特異な状況に置かれたその姿である。動物園の猛禽を連想させる行者の姿がカスナーの知的な好奇心を引きつけ、その形姿を契機にして、カスナーはインドに代表される非ヨーロッパ文化の本質的特性に迫ろうとする。動物に成りきったジャイナ教徒に、鏡像のもつような客体性を無効にして「他者の中へ飛び込む」意志があると解釈し、後に「魔術的」とか「同一性」という用語で捉えられることになる非キリスト教世界について、また一つ思索を重ねている。檻の中のジャイナ教徒は、こうした思索を呼び出したことにより、旅の単なる印象から一つの意味深い言語的形象へと、魔術的異教的な世界を表す比喩的形象へと高められる。現実のジャイナ教徒自身は「形象性や比喩の彼方へ越え出て」しまい、もはや想像力の働かない世界にいるが、カスナーのエッセイという言語表現のレベルでは、ジャイナ教徒の形姿は想像力の生み出す形象であり、比喩である。

カスナーのインド旅行は、ラクナウのアーリーだけではなく、現実を形象化する二つの力——文学的想像力と哲学的思索——をも従者に従えてこそ、豊かな実りをもたらしたのである。

注

テキストは、Rudolf Kassner: *Sämtliche Werke*. Im Auftrag der Rudolf Kassner Gesellschaft hrsg. von Ernst Zinn und Klaus E. Bohnenkamp. Bd 7, Pfullingen 1984; Bd 9, 1990 を使用し、引用(参照)箇所は巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で示した。

- (1) Vgl. VII-674ff.
- (2) Vgl. Kassners Brief vom 15.06.1905 an Elsa Bruckmann, in: VII-677 Anm. zu VII-160 Z.10-5 v.u.
- (3) Vgl. VII-684 Anm. zu VII-205 Z.21f.
- (4) Kassners Brief vom 19.09.1908 an Lili Schalk, in: *Neue Zürcher Zeitung* vom 09.09.1973, S. 50.

- (5) Edward Morgan Forster: *A Passage to India*. 1924. (E. M. フォースター『インドへの道』瀬尾裕訳、筑摩書房 1985年) フォースターは1912年秋から1913年4月にかけてと、1921年にインドに滞在している。
- (6) Vgl. VII-201f.
- (7) 筆者は残念ながら Thanessar の地理的な位置が確認できなかった。注9に挙げる1908年12月1日付けの書簡でカスナーは「神がアルジュナに現れたと言われている」土地として "Brahmasar [?]" という地名を挙げているが、それが後に Thanessar と混同されたのか。しかし筆者は Brahmasar の位置も確認できなかった。
- (8) Vgl. VII-167ff.; VII-678.
- (9) Vgl. Kassners Brief vom 01.12.1908 an Lili Schalk, in: *Neue Zürcher Zeitung* vom 09.09.1973, S. 50; VII-188ff.; VII-681f.
- (10) Vgl. IX-758; *Baedeker Allianz Reiseführer. Indien*. Ostfildern 1997, S. 283f.
- (11) VII-676にはMadura、Tanjurと書かれているが、それぞれMadurai、Tanjoreのことと考えられる。
- (12) Kassners Brief vom 01.12.1908 an Lili Schalk, in: *Neue Zürcher Zeitung* vom 09.09.1973, S. 50.
- (13) 筆者は1997年版の *Baedeker* しか利用できなかったが、ここではタネサールとカプールのタラを除くすべての都市が紹介されている。